

魚柄仁之助



世渡りの技術

年間生活費**50万円**は可能だ！



世渡りの技術

年間生活費**50万円**は可能だ！

魚柄仁之助

魚柄仁之助（うおつか・じんのすけ）

食文化研究家。1956年福岡生まれ。安上がりで安全な食生活を模索し続けて30年。気がつけば、冷凍食品も加工食品もほとんど使わない、冷房も暖房もない、クルマもない、という昭和初期そのままの生活を普通に実践中。ひと様からよく言われるのが「昔の人みたい」。現在、20数年間にわたって収集した戦前から戦後にかけての食文化に関する膨大な史料をもとに、日本人の食文化の変遷を研究中。主な著書に『食べかた上手だった日本人』（岩波書店）、『冷蔵庫で食品を腐らす日本人』（朝日新書）、『冷蔵庫で食品を腐らせない日本人』（大和書房）、『明るい食品偽装入門』（サンガ）など多数。

装丁：森 裕昌（森デザイン室）

写真：前林正人

イラスト：奈和浩子

「毎日が命日」書：堀込和佳

よ わ た ぎ じゅつ ねんかんせい かつ ひ まんえん か の う
世渡りの技術 年間生活費 50 万円は可能だ！

2009年10月26日 初版第1刷発行

著 者 魚柄仁之助

発行者 新田光敏

発行所 ソフトバンククリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13

電話 03-5549-1201（営業部）

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。定価はカバーに記載されております。本書の内容に関するご質問等は、小社学芸書籍編集部まで必ず書面にてご連絡いただきますようお願い致します。

世渡りの技術



はじめに

世渡り上手……というと、何やらずるがしっこく生きていくような感じを持たれるかもしれませんが、それ、マチガイ。他人や社会との人間関係を上手に保ち、いい間柄で生きていける技術のことなんです。世渡り技術で生き延びてきた自分の人生、ちよいとふりかえて、この本を作ってみました。

あたしにはリストラや失業というもの、まーったくご縁がないのです。だって就職したことないんですもん。親元離れた19歳から53歳の今日まで、何らかの商売をしながら喰いつないできたんです。兄は有名私鉄に勤め、弟は教育玩具輸入会社に勤めておるのです。どちらも、大学出てからその会社ひとすじという、マジメなニッポンの社会人、いや、会社人をやっているのです。

それにひきかえこのあたし、なーんの保障もない暮らしを35年近くやってきてるんですね。一応、国立大学には入ったものの、資格も取らず、単位も取れず、卒業証書すらもらっておら

ん。在学中に二輪屋を開いて、「商売」というものを体験し、バブル景気のすきまを狙って古道具屋を開いた。おりからの土地バブルで自由が丘や田園調布の古い家はどんどんと壊されてたんで、大正く昭和のアンティーク家具なんざ「タダ同然」で手に入ったもんだから、それを集めて売ってたんですね。

しかしこの商売も、しょせんバブル期だけのことで割り切ってたので、古道具屋のかたわら、食文化作家の準備をしておりました。そして1994年、『うおつか流台所リストラ術』（農山漁村文化協会刊）を出版し、今日までに50冊以上の本を出し、連載の仕事もだいたい月に10く20本かかえておるのです。

振り返ってみると、仕事って、数年区切りの綱渡りの連続だったんですね。何の資格も持ちちゃいないが、自分の技術をお金に換える「換金力」はあったようです。

まったく地に足のつかんプラプラした生き方のように見えるでしょうが、20く21世紀の生き方、稼ぎ方は、明治以前とは明らかに違ってきていると思います。呉服屋の息子は呉服屋、農家の子は農家といった産業形態は、化石燃料がとりいれられて以降大きく変化した。今日売れているものが、明日売れるとは限らない。

あたしの生まれた家は大正7年創業の料理屋でして、戦前・戦後、大いに繁盛したらしいが、外食産業が盛んになった1970年代以降、一気に売れなくなった。昔は時間の流れもゆ

るやかで、社会の変化もゆるゆるしたものだったが、今や時間の流れは、まさにナイアガラの滝みたいなスピードになっちゃったんですね。そんな時代ですから、臨機応変に対応できる態勢をとっておかねば取り残されてしまうのではないでしょか？

まあ50歳までは、このような綱渡りをやってきましたが、この先はいかに生きてゆくのか——を考えてみたんです。

まあ何歳まで生きられるかはわからんが、「食べていけるだけの稼ぎ」は確保せにやらんし、ムダな出費をおさえるべく、「お金を使わん技術」をもたねばなりません。

現在、「作家」として原稿料で食べていますが、この稼業、読者に飽きたらオシマイなの。だから次の作品ネタを常にいくつか用意しておるのです。マンガの原作の準備もやっというおかげで、小学館から連載の話が来た時、すぐに対応できました。最近では、ラジオ番組を週1回こなしたり、ラップや削り節の広告の仕事もやっております。来る仕事を拒まず、片っ端からひきうける。もちろん失敗もたまにやありますが、うまくいかなかった時は「なぜ失敗したのか？」を検証し、そこから教訓を得たら、あとはキッパリと忘れてしまうのです。いつまでもクヨクヨうだうだしない。ま、あきらめ上手、忘れ上手の忘れんぼ將軍といたったとすな。

そして、お金に困らん老後をすごすために、ムダな金は使わんことですね。そのためには

「虚栄心」というものとサヨナラすることですな。きれいな服やバッグで着飾っても、それはアナタ自身とは関係ないんですな。物欲にとらわれると「虚栄心疲労」のもととなるのです。

ただ単に節約するための本なら、腐るほど出ておりますが、あたしゃそうぢやない。「金を使わん技術」とセットで持ち合わせているのが、「金を稼ぐ技術」なんですな。金を使わん……だけなら、そりゃケチンボや節約さんの世界でしかない。しかし、あたしゃ、そこそこに稼いでおるのです。年間50万円しか使わない人が、年間2000万円以上稼いでいたらどーでしょ？ 決してガマンガマンの節約なんざしておらんのです。でも、ちよつとの仕事で、そこそこのおあしをいただいて、口を糊しておるんですね。

「世渡りの技術」というタイトルには、その裏側に「売れる技術」または「儲かる技術」がひそんでおるのです。そのへんのことを「おいといて」、買わない……とか節約……とか言うのは、まやかしだよな。

まっとうに金を稼ぐことをやればいいのだっ。50歳になった頃、そんな風に思ってたこの原稿にとりくんだんです。そして自分の生活なんぞを今一度チェックしてみたところ、ここ数年の食費・光熱費などの生活費は、年間36万〜50万円くらいしかかかってないんです。冷房も暖房も使わないから、光熱費もいたって安い。かと言って、山の中で電気もガスも使わん、いわゆるエコ仙人みたいな暮らしはしたくない。米国のアーミッシュみたいな文明否定もしたくはな

い。ほどほどに文明の力も利用するが、米国のようなエネルギーバカスカ浪費文明のようなのはやだな。電動アシスト自転車みたいに、ちょっとだけ文明の力を借りるだけで、暮らしはとっても楽になる——そんな、ちょっとした、ささやかなありがたさを感じて生きていきたいと思っております。

同居人が単身赴任で仙台にいた頃、JR仙山線で作並に行った。そこにはニッカウキスキーの工場があつて、無料見学・試飲ができるのだ。半日かけて見学して、おまけにニッカの15年ものまでいただき、大満足して仙台に帰ったんですが、使ったお金はJRの1000円のみ。ワシらこれで十分にシヤワセだったのだ。

今現在、自分は商人だと自覚しておりますが、二輪屋・古道具屋の頃と違って、在庫というものがない。これからの時代、在庫をかかえこむのはとっても危険。今日売れるものは、今日売っちゃいましょう。人生は綱渡り、明日は誰にもわかりません。私の座右の銘、それは「毎日が命日」なのです。

はじめに 3

あそびをきわめる 12

集中力で世渡り上手 16

何かを「できる」人になる！ 22

買わないですませるためのチカラ 28

階段筆筒を手に入れるまで 34

ペーパーナイフに没頭した日々 40

自分なりのゼイタクを発見する 47

大切な約束	54
ラジオが……好きなんです	60
ランプシェードにもドラマあり	67
自分で弾けばレコードいらん	74
1000円ベロベロ紳士たちの社交場	80
買ひものは信頼のやりとり	86
お金のいらない生活	93
さようならエゴロジ	97
暑さ寒さも気の持ちよふ的生活法	102
電化信仰	108
太陽電池と人力時計	115

自転車の達人

.....

120

単身赴任で儲けてしまった

.....

126

実録！長距離バス活用人たち

.....

132

よっちゃんなんばん

.....

137

アナログ的検索のすすめ

.....

143

「修理して使いつづける」生活

.....

147

いろんなものを干してきた

.....

154

道具を使って頭也使おう

.....

159

自分で仕事をつくっちゃえ

.....

165

年間いくらあれば食べていけるのか？

.....

169

定年・老後・おひとりさま

.....

174

人生ものさし

.....

178

あとがき
182

編集協力Ⅱアトリエ花粉館

あそびをきわめる

子どもの頃から、興味のないことにはまったく手を出さん性格でした。その代わり、「おもしろい」と思ったことはトコトンやっておったです。

大学に入ったものの、授業がゼーぜんおもしろくない。家畜繁殖学なんぞ退屈きまりなものだったんで、5分とたたずに退場しておりましたな。そんなことより、全国の畜産現場に興味がありましたんで、北海道から沖縄まで、各地の畜産試験場や牧場を見てまわっておりました。大学の授業と違って、現場には日本における畜産の現状が転がっておる。飼料はほとんど輸入頼みで、労働時間も長いし、その経営状態も危ういものだったんだ。こんな業界でいったいどこが楽しいんだろう？と、畜産に対する興味がスッポーンと失せてしまった。

大学に行かず、好きなギターいじりやバイクいじりをやってたら、それらが商売になってしまい、二輪屋を開くことになったんです。とはいえ、一生二輪屋を続ける気はサラサラなかった。何せ宇都宮郊外の新興住宅地に店をかまえてたもんだから、そりやもう田舎も田舎でして

……。2年以内に東京へ移ろうと決めた上での開業だったんで、二輪屋の1年8カ月は、次にやることへの準備期間だったんですな。それまで一生に一度はやってみたかった商売が古道具屋だったので、そのための準備をやってましたの。二輪屋で一応商売というものはわかったの
で、次は何としてもあこがれの古道具屋をやろうと、古物商免許をとったり、自由が丘や吉祥寺で貸店舗を探しておりました。

ちょうどその頃、リサイクルブームとやらで、各地でフリーマーケットやガレージセールなどが開催されておりました。その反面、自由が丘や田園調布といった高級住宅地では、戦前からのお屋敷がかたっぱしからとり壊されてたんですね。モノを大切にリサイクルしよう！——という運動と、古いモノをゴミとして処分する土地バブル。このギャップはおもしろいのではないかと!!と、骨董屋稼業に胸をふくらましておったんです。

おもしろがって始めた二輪屋に続いて、おもしろがって始めた古道具屋も、思った通り楽しかったんですね。世間では欲しいものを買うためにセッセとお金を使っているかと思えば、モノを捨てるためにこれまたセッセとお金を使ってたんですなあ。だったらお金をいただいて処分品を引き取り、それらを「アンティーク」とか「資源を大事にするリサイクル」とか言えばいい商売になるんじゃないかな？ こいつぁーおもしろえ!! そんなあそび感覚で、古道具屋を約10年もやっちゃったんですね。

たしかにバブル期における古道具屋は十分楽しかったが、同時にこんなバブリーな経済がつまでも続くわけではないだろうし、続いてはイカンと思っておりました。それで古道具屋の次はもの書きになっちゃおうとたくらんでおったのです。

二輪屋のころ、図書館で本を借りまくっては、店番のかたわら、まさに乱読しておりました。筒井康隆、池波正太郎、大藪春彦など……ひとりの作家の作品をトコトン読み込み、その文体分析をして楽しんでたんですね。いずれ自分も文章を書いて生活してやろっと考えてたんですな。とは言っても、筒井センサーみたいなSF、池波センサーみたいな時代物、大藪センサーみたいなハードボイルドなどはまったく自信がない。ライフワークとしてずっと研究を続けている「食文化」をテーマにした作家ってのが、一番似合ってるなあと考えた。料理や食文化の本は大量に読んでたし、連日連夜いろいろな料理を作っては友人らに食べさせておりました。もうこれしかないと思い、1990年頃には大学ノートに料理のレシピなどを「食日記」として大量に書いておったんです。これらをもとにして、世間が「アッ!!と驚く」ような食文化の本が書けんもんぢやるか?と、約2年ほど、うーんうーんとうなりながらたくらんでおったのです。そして「これやっ!!」と思いついて、1993年にたった2週間で書き上げたのが『うおつか流台所リストラ術』でした。これを書いている時は実に楽しかったし、発売されてからの世間の騒ぎようも楽しかった。たぶん、自分の人生で最も遊んだ時だったんですな。